

最優秀賞 国土交通大臣賞

命を支える水

茨城県 筑西市立下館中学校

二年 大山 拓実

「お水ちょうだい」
小さい頃から、僕の飲み水はいつも水だった。朝も、遊んでのどがかわいた時も、遠足の水筒の中身も。他の食べ物の味をじやますることなくのどをすっきりとうるおしてくれる所が好きだ。

一歳にならない頃、僕は喘息になった。体も小さく食欲もなかった。二週間に一度通院し、毎日薬を飲む。ひどくなると吸入したり、入院したりした。苦い薬や吸入の煙は、胸の奥までむせかえった。大嫌いだ。でも、家族と離れて入院するのはもっと嫌だったので我慢した。吸入の後の水は、苦みも一緒に体の中へ押し込んでくれるような気がした。嫌なことから解放された安ど感からか、ほっとしながら水を飲んだことをよく覚えている。三歳になり、スイミングを習い始めた。水の中でふわっと浮く不思議な感じや、水の中で魚のように体を自由自在に動かせる快感から、僕はスイミングに夢中になった。プールでたくさんさんの友達ができ、いろいろな泳ぎ方を覚えることができた。小児科への通院の間隔が開くようになった。

今までじっくり考えたこともなかったが、僕にとって水は、なくてはならない飲み物であり、たっぷりと水を

張ったプールは、僕の体を鍛えてくれた大切な場所だった。そして、いつも安心して水を飲んだり楽しく体を動かしたりすることができたのは、僕が日本という水資源に恵まれた国に生まれたからなのだ。

日本は、水資源に恵まれた国だ。周りを海に囲まれ、降水量も多く国土にはたくさん土地が連なっている。山々の森林が作り出す土壌の働きによって、洪水や水不足を防いでいる。そして、森林の浄化作用によりわき水はおいしくなる。この僕が生まれてくるずっと前から行われてきた自然の営みにより、僕達はたくさんさんの恩恵を受けてきた。そして、日本のすぐれた浄水技術により、浄水場できれいで安心な飲み水として、じゃ口をひねれば、いつでも好きなだけ水は僕達の家に届けられるようになった。

しかし、その一方で、近年森林伐採などの自然破壊、生活排水や排気ガスなどによる環境汚染、放射能汚染などにより、水の安全性が心配されるようになってきている。水は自然の大きな力によって循環している大切な資源であり、森林、空気、川、土壌どれかひとつ欠けてしまっても汚染されてしまうのだ。

だから、僕達は、忘れてはならないと思う。水は飲み

水だけではなく、お風呂や洗濯など日常生活をしていく上でなくてはならないものであること、体を鍛えたり心を安らかにさせたりする力があること、農業や工業を支えている大切な資源であること、小動物や植物など地球上の生き物全ての命の源であること、そして資源には限りがあるということ。

限りある水資源を守るために僕達が今できることは何だろう。洗剤の量を減らすこと、ゴミを増やさないこと、植物を増やすこと、水を大切に使うこと・・・。当たり前前においしく安全な水がなくなってしまう前に、できることから努力しなければならぬ。

連休に入り、田植えが始まった。水面は太陽の光で輝き、夜にはカエルの鳴き声が聞こえるようになった。田んぼの中にはおたまじやくしやゲンゴロウが気持ちよさそうに泳いでいる。たくさんの生き物がこの田んぼの中にいて、生かされているのだろう。いつもは何気ない風景が、すごいことのように思えた。

水は、全ての命の源である。なくてはならない僕の命も支えてくれている。そう考えながら飲んだ水は、いつもよりずっとずっとおいしく感じた。

優秀賞 国土交通省水管理・国土保全局水資源部長賞

私が水に思うこと

徳島県 上勝町立上勝中学校

一年 笹尾 咲良

「プルルル。」また、父の携帯が鳴った。さつきから、もうこれで何度目だろう・・・。一昨年の学童保育「上勝あすなるクラブ」の一泊遠足。愛媛県にある伊方原子力発電所を見学するこの遠足を私は何日も前から楽しみにしていた。その帰りのバスの中のことだった。横で聞き耳を立ててみると、どうやらどこかの水道の水が漏れているらしい。「どうして、こんなときに限って。」と私は心の中でつぶやいた。夕食に寄ったサーブエリアでも、父はあまりごはんを食べなかった。楽しく会話する私たちの輪を避けるようにして、何度も何度も電話をかけていた。水道工事のだんどりをしていたのだ。私の父はこのころ上勝町役場の建設課水道担当をしていた。家に着くと、父は無言でカッパを羽織り、飛ぶようにして現場に向かった。家族みんなそんな父を見送った。私はその時本当は仕事に行ってほしくなかった。大雨が降っていたので土砂くずれが心配だったからだ。その数日前も近所で大きな土砂くずれが起こったばかりだった。その日の夜、私は目がさえて、なかなか寝付くことができなかった。父は結局、私が起きている間には家に帰ってこなかった。あとから母に、ずぶ濡れの父が明け方へトへトになって帰ってきたことを聞いた。次の日の朝、

父は普段通りの時間に何事もなかったかのように仕事に出かけた。このようなことが重なるにつれて私は正直父が水道担当になったことをあまりうれいとは思わなくなっていた。遊びに行っている時も、いつ仕事が入ってくるかわからないし、いつもどこかに出かけるときは、なんだか落ち着かなくて心の底から楽しむことができなくなっていた。以前はそうではなかったからよけいに寂しかった。夜中にひんぱんに仕事に出かける姿を見て一度質問をしたことがある。すると父は「水がどれほど生活に大切かということ」を話してくれ、「夜に出かけるのは、修繕工事をするとき迷惑がかららないように夜間に断水し、朝には使えるようにするためだ」と説明してくれた。自分の事しか考えなかった自分が恥ずかしくなると同時に、それだけ大切な「水」を守る仕事をしている父を誇らしく思った。

私たちが日常の飲料水として利用している水について父がこの仕事をするようになってから学んだことがある。小学校四年生の社会の時間に外部講師として私のクラスで授業をした父は「山の水は、一般的にはきれいだけど、

飲料水として利用するには不適切で、どうしても微生物が存在している。」だから、「人の手を加えて安全に飲めるようにしなければならぬ。」と教えてくれた。私たちが住む「彩りの町」上勝町は水資源に恵まれ、全国百選の棚田や鮎の泳ぐ清流勝浦川など町のいたる所に、美しい水が流れている。私は放っておいてもこの自然が守られ、水も何の苦労もなく使用することができていると思っていた。しかし、その向こう側で水源地を管理したり、水をろ過する施設を常に点検したり、また定期的に塩素量を測定し、補給している人たちがいることをその時、初めて知った。

この間、父は「水を守る仕事」は大変だけど、「水を守る」ことは「生活を守る」ことであり、「命を守る」ことだとも話してくれた。私たちは今まで当たり前のように水を使ってきた。でも、「当たり前」の裏側では一生懸命水を守って努力を続けてくれていた人たちがいる。一滴の水が使えるありがたさを心にとめることから私は出発したい。これからは、歯磨きや手洗いをする時でも水ができるだけ止めて使うようにしようと思う。友人達にも水の大切さを訴え、使い方、節水も呼びかけたい。勝浦川の源流の町、上勝に住む一人として「命を守る」ため「水を守る」一歩を私は今、勇気を出して踏み出したい。

優秀賞 全日本中学校長会会長賞

水が育む日本の美しさ

群馬県 伊勢崎市立第四中学校

一年 芝崎 遥奈

私には、心から感動した風景があります。それは、初めて飛行機の中から見た沖繩の海です。小さな窓から見えた海は、絵や写真では表せない程の美しい色をしていました。

私が沖繩を訪れたのは、小学四年生の時、西表島のエコツアーに参加する機会があったからです。私は、そこで漂着ごみやマングローブ植林などの様々な環境に対する学習をしました。そして、島では生活排水を出来るだけ減らすなどの、数々の水をめぐる環境を守る努力がされていく事を知りました。

蛇口をひねれば、当たり前に出てくる水。水資源の豊富な群馬に住んでいる私は、疑問に思った事も無かったのですが、沖繩にいた数日間で、それは当たり前ではないのだと気付かされました。

「自然の恵みを少しでも分けけてもらい、無駄に自然を使わない。」それは、島に生きる人々の知恵なのだそうです。

こうして自然を守り抜く西表島で、私達はマングローブ染めの体験をしました。そこで、驚いたのは、染めた布を西表の澄んだ海の中に浸けた事です。そうすると海水の作用で、きれいな色に仕上がるのだと聞きました。

これは、美しい海の水だから出来る業なのだそうです。父も、赤城の座繰り糸を使って、着物を作っています。染めの材料は、藍や様々な木の実や樹皮です。それを、やはり必要な分だけ煮出し、染料にしています。

着物を作るのには、沢山の水を使います。まずは染める前に、糸を水に浸して染めやすくします。木の実や樹皮の染料を作るのも、多くの水が必要です。そして、染めた糸も、後で色が落ちない様、念入りに水洗いを何回もします。布に織り上げた後も、「のり抜き」と呼ばれる洗濯の様な作業をします。

これらの、どの工程にも欠かせないのは、きれいな水です。そして、そこで使っている水は、主に利根川から運ばれる地下水を汲み上げています。この豊富な水が無くては、父の仕事は成り立ちません。

去年の停電の時、昼間は仕事が出来ると思っていた父が、水を汲み上げる電動ポンプが動かなくなっていました。全く仕事にならないと苦笑いをしていました。この時、着物を作るのに、水は、とても大切なものだという事が、良く分かりました。

「沖繩」と「群馬」。この様に、場所が違っても、きれいな水から美しい布が作られています。私は日本の文化

にとって、水は欠かせないものなのだと感じました。

日本は、水に囲まれた小さな島国です。この国には、様々な顔を持つ四季があり、その景色の中には、柔らかなで温かな優しい色があふれています。父の着物に表現されるそれは、豊富な水が育む美しさなのだと思います。私は、この日本の色を失わないために、自然を大切にしたいかなくてはいけないと思います。

私は今、沖縄から持ち帰ったマングローブを育てています。マングローブは、多くの島国で侵食を防ぐために植林されています。その他にも、この木は多くの酸素を出し、海の水を浄化する可能性を秘めています。

私は、それを証明する実験を自分なりに続けています。この木に限らず、私は、これからも環境を守る働きがある植物を見つけ、研究してみたいと思っています。私の結果は、小さいものかもしれないけれど、いつか役立つ時が来れば良いなと思っています。

そして自然の力を使って、様々な場所の海や川が、本来の美しさを取り戻せる未来が来る事を、私は心から願っています。

優秀賞 水の週間実行委員会会長賞

あたり前の生活

福島県 大熊町立大熊中学校

二年 岡田 愛莉花

どこにでもあり、いつでも手に入る。それが、震災前の私の水への考え方だった。学校から帰り、手を洗う時、蛇口をひねれば簡単に水が出る。喉が渴けば、コップに注げばいい。そんなことは日常生活においてあたり前のことであり、そう考えていたのは私だけではないはずだった。しかしあの日、大震災が私達を襲った日、水の恐ろしさと有り難さを私達は思い知らされることになる。三月十一日。私は下校途中に地震に遭い、自宅の様子や家族の安否が心配で、不安な気持ちをおさえながら足早に家へと向かった。自宅に戻り玄関の戸を開けると、家族の顔は青ざめ誰もがオロオロするばかりだった。私の頭も混乱して、今何が起きているのか飲み込めないでいた。さらに追いうちをかけるように余震が次々と私達を襲ってきた。私は恐怖のどん底に突き落とされていった。停電し、暗闇へと姿を変えた町。何もできずに家の中で丸くなって震えていた私は、手さぐりでトイレを探した。その時、ある事が私を困らせた。水が流れないのだ。祖母に伝えると、祖母は普段溜めていた雨水を使い流してくれた。祖母たち大人は、「断水」という私には聞き慣れない言葉を口にしていった。翌朝、私は水道で手を洗おうとしたり、水を飲もうとしたが、その後水が姿を

現すことはなかった。私達の住む大熊町には、東京電力福島第一原子力発電所があり、その発電所の事故で避難を余儀なくされ、私達は避難所を転々とすることになった。津波の被害を知ったのは、田村市の文化センターへ避難した数日後のことだった。東北沿岸部のあちこちで、水が人間に牙をむいたのだった。多くの尊い命や建物を一瞬のうちに奪った海。恐ろしかった。幼い頃、祖父母と遊んだあのキラキラ輝いていた美しい海が、初めて恐ろしいと思った。水は大切だ。と言われても、ぴんと来ないのが本音だ。今回起きた津波や水難事故。これらをまとめて「水」と考えた時、素直に大切だとは思えなくなってしまう。しかし、それらを水の全てと考えるのではなく、水の一面と捉えた時、水はただ恐ろしいだけのもではなく、水の一側面ではないだろうか。逆に、水が消えた地球を想像してみよう。水不足が世界中で起こった時、地球の動植物、そして人間の命は失われるであろう。私達が生きている「あたりまえの生活」は、水があつて初めて成り立つものなのだ。避難先の体育館で、久しぶりに水を口にした。支援で頂いたミネラルウォーターは、涙が出るくらい美味しいものだった。手を伸ばせば、いつでも手に入る水が、

とても貴重なものだと思いが付いた瞬間だった。「たかが水
だろう」と思う人もいるかもしれない。だが、「たかが水」
ではないのだ。なぜ私達は今まで好き勝手に水を使い、
貴重なものとして扱ってこなかったのだろうか。水は身近
なものだからこそ、その大切さに気が付かないのかもしれない。

水は資源というもの以上に、私達人間の命そのものだ
と思う。水を守るといふ事は、命を守るも同然。だが使
い方を誤れば、水は人間の命を奪う凶器となってしまう。
津波などのように、時折、水は暴走をしてしまう。私た
ちは、一日も早く暴走を食い止めるための対策を考え、
実行していかなければならない。つまり、水の利便性と
危険性を十分理解し、正しく安全に効率的に使わなけれ
ばならない。それが、私達人間が水を使うことへの責務
なのだと思う。

私は大震災から多くの事を考えさせられ、たくさん学
んだ。全国の方の温かい心にも触れ涙した。そんな中、
改めて「水」について考える機会を与えられたことに感
謝したい。この貴重な経験から、水があるから人間が存
在できるといふ事を心に刻み込んでおきたいと思う。そ
して、穏やかで「あたりまえの生活」が一日でも早く訪
れる事を願っている。

優秀賞 独立行政法人水資源機構理事長賞

節水の心を捧げる

愛知県 滝学園滝中学校

二年 伊藤 正子

「弥生時代の人々は、井戸を掘って水が出たら、埴輪を井戸に沈めていたんですよ。」

春休みに訪れた奈良県立橿原考古学附属博物館のことだ。観光ボランティアの方の説明を聞いた私の頭の中には、クエスチョンマークが縦横無尽に飛び交った。なぜ、埴輪を井戸に沈めるんだろう……。それぞれの展示物に掲げられた注釈をていねいに読んで、博物館を回るときも疑問は解決しなかった。初対面の人が苦手な私だが、思い切ってボランティアの方に尋ねてみた。ボランティアの方は嫌な顔をするどころか、よくぞ聞いてくれましたとばかりに答えてくださった。

「人間は、水がなくては生活できませんね。でも、昔は、水道などという便利な物はありませんでした。そして、飲み水となるきれいな水が得られる井戸を掘り当てるのは、とても大変なことでした。だから、生命の源となる飲み水を得られる井戸への感謝の気持ちとして、埴輪を捧げたのではないかと考えられているんですよ。」埴輪は、井戸への捧げ物だったのだ。それを聞いた私は、埴輪は、水の神様への捧げ物だったのではないかと感じた。古墳に埋められていた埴輪の意味を考えれば、うなずける。水は、今よりもずっと大切に扱われていた

にちがいない。

奈良からの帰りの車の中で、私は家族に宣言した。

「明日は一日、ペットボトルにためた水で生活することにした。」

「私も一緒にやろうかな。」

春休み、何かしたそうだった姉も加わった。翌朝、二リットルの空のペットボトルを一人一本ずつ用意して、節水生活をスタートさせた。川や井戸に水をくみにいくわけじゃないし……。と、簡単に考えていた私だったが、水道の蛇口をひねれないのは、相当なストレスだった。

顔を洗う。歯みがきをする。毎日のお決まりの行動がスムーズに運ばない。時間が倍近くかかる。学校に行く日なら、完全に遅刻だ。うーっ、歯ブラシをコップに入れた水でカシヤカシヤ洗ったけど、よごれが残っている気がする。そんなことを思っていたら、姉が少し困ったような顔できいてきた。

「どうする？トイレ。流したら、だめなんだよね？」

忘れてた。水洗トイレか……。そうだった！
「十八年くらい前、牧尾ダムがピンチになったとき、夜中は断水で水が流せなかったって、お母さんにきいたよ

ね。お風呂の残り湯で流したって、言ってたよね。」
姉と私は、トイレに行くたび、お風呂の残り湯を運んで流した。午前中だけで、姉と私はへトへトになった。水道が使えないって、こんなに大変だったんだ。二人が、水道のありがたみを知るのに、さして時間はかからなかった。

私が住んでいる東海市は、愛知用水ができるまで、ため池を頼りに生活していたそうだった。愛知用水の完成で、人々の生活は楽で、豊かなものになった。農業も工業も発展した。愛知用水のおかげで、現在の暮らしがあるといっても過言ではない。厚生労働省令により、水道が整備されている。浄水場でろ過、消毒された安全でおいしい水が、各家庭に送られてくる。この安全でおいしい水を後世まで伝えるには、一人一人が水を無駄使いせず、よごさない工夫をしなくてはならない。なぜなら、水は有限であり、循環しているからだ。水を守ることは、七十パーセント以上が水でできている自分の体を守ることに繋がる。ペットボトル生活はやめたが、蛇口から出る水を鉛筆の太さにし、出しっ放しをやめた。

弥生時代の人が井戸に捧げ物をしたように、私は水道に節水の心を捧げる。それは、地球を守り、自分を守ることに繋がるのだから。

優秀賞 全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞

「わが家の節水大作戦！」

京都府 立命館宇治中学校

三年 和歌 すがお

中二の夏のことです。

夏休みの宿題で「雨水を活用する」という課題が出ました。絵が得意な僕は「貯めた雨水を使って水彩画を描く」というアイデアを思いつき、早速雨の日に十リバケツ三つ設置しました。絵の具を溶くだけでなく、筆やパレットを洗うのも雨水で、と考えていたので、結構な量の水が必要になるからです。ところが、夜通し降ったにもかかわらず、バケツの雨水はあまりに少なく、僕の予定では一夜明けたら溢れんばかりになっているはずだったのに、底から数センチ「チョロツ」と貯まっているだけ。しかも何故か砂や木屑の様な物まで混じっているのです。綺麗にこして使える水にする為に、雨水の量は更に減ってしまいました。そうしてひと夏、苦勞して雨水を集め、なんとか課題を提出できた次第です。

もう一つ、世界の住居を調べるという課題にも取り組ましました。僕が選んだのは、セネガルのエルバリン村の「漏斗型屋根の家」という住居です。その地域では生活用水を確保する為に、屋根を漏斗型にして雨水を貯め、乾期には数キロ離れた隣町までの川の水を貰いに行くという生活を送っていました。僕達日本人には考えられないことです。蛇口をひねれば、清潔で安全な水が出てく

ることが当たり前の生活。トイレに行く度、シャワーを浴びる度、歯を磨く度、何も考えずに水を使い放題だった僕！なんだか急に恥ずかしい様な、自分を責めたい様な、そんな複雑な気持ちになりました。動機は自分勝手ですが、罪悪感から逃れる為に、僕は節水に励むことを誓い、家族にも宣言し、協力をあおぎました。その日から僕達一家の節水大作戦が始まったのです。

風呂水洗濯に利用するのはよく知られた節水方法ですが、僕は更に無駄をなくす為に次の方法を考案しました。

- 一・シャワーを使うのは最短にし、なるべく浴槽のお湯を使う。

- 二・毎日洗濯機を回すのを止めて、その日出た洗濯物は出来る限り各自手洗りする。

- 三・余った水は、バケツに移してトイレを流すのに使い、洗濯機を回すのは週一回。

これらを実践することにより、毎日の風呂湯が無駄になることはありません。初めはトイレをバケツ水で流すのを「面倒やなあ」とブツブツ言っていた父も、「洗濯物多い！」と文句を言っていた母も、次第に当たり前の様に実践してくれる様になりました。それから、皿洗いは僕の毎日の仕事なのですが、アクリル毛糸で作ったエコタ

ワシを使ったり、泡切れの良い洗剤を選んだりして工夫してみました。ここまできると不思議なもので、「もっと節約できないか、もっと無駄を省けないか」と節水に取り憑かれてしまいます。でも、それはイヤイヤでも苦痛でもなく、「どこまでできるか」というゲーム感覚になっ
てくるのです。バケツ水があるのに父がうっかりレバーで流してしまい、僕が怒って水道栓を締めた時は、さすがに「やり過ぎやで」とひんしゆくをかいまいましたが、そんな節水生活を続けた結果、なんと一ヶ月の水道の使用量が約四分の一にまで減ったのです！これには両親もビックリ、家族の手前「な、結果に出るやろ？」とクルに装った僕も、内心ビックリです。その後も、無理のない程度に節水生活を続け、今に至っています。このことをきっかけに、水に限らず我が家のエコ意識はグンと高まりました。

蛇口をひねれば水が出ることに、何のありがたみも感じず、当たり前前と思っていた僕はもういません。苦勞せずとも清潔で安全な水を使える環境に感謝しつつ、水を大切に、無駄を省いた生活を、今後もずっと続けていくつもりです。